聖　書：Ⅰサムエル 23：1〜29
説教題：仕切りの岩
日　時：2017 年 5 月 14 日（夕拝）

ダビデは今、サウル王に命を付け狙われ、逃亡の生活を余儀なくされています。そんな彼は 22 章最後の 23 節で注目すべき発言をしました。彼のところに逃れて来たエブヤタルに対して、「私といっしょにいなさい。恐れることはない。・・私といっしょにいれば、あなたは安全だ。」と。ダビデはサウルに追われて一度はペリシテ人の地へ逃れましたが、預言者ガドの「さあ、ユダの地に帰りなさい。」との言葉に導かれて、自分の国へ戻って来ました。ここはサウルが支配している国であり、サウルはダビデを見つけ次第、彼の命を取ろうとしています。果たしてこのような中で「私といっしょにいれば安全だ」というダビデの言葉は本当であり得るのでしょうか。この 23 章でも色々なことが彼の上に起こります。その中で、彼の言葉が本当かどうかが試され、明らかにされて行くことになります。

まずダビデの耳に飛び込んで来たのは、ケイラがペリシテ人に攻められているという知らせでした。ケイラとはダビデと同じユダ族の中の一つの町です。ダビデにこの知らせが届いたのは、ケイラの住民がダビデに救いを期待したことを示しているのかもしれません。果たしてダビデはどうすべきでしょう。彼は逃亡中の身ですから他人を助けている場合ではないと考えるのが普通でしょう。戦いに出て行ったら「私はここにいますよ！」とサウルに教えることになってしまいます。ダビデはまず主に伺います。すると主の答えは「行け。そしてケイラを救え。」というものでした。ダビデの部下たちは反対します。そこでダビデはもう一度 4 節で主に伺いましたが、答えは同じでした。この御心に従ってダビデは出て行きます。そしてペリシテ人を打ち負かし、勝利を収めます。ここにダビデが主によって王として立てられている器であることのまた新たな印が示されました。本来このような働きをするのは王であるサウルの役割です。しかしサウルではなく、ダビデがこの働きに成功したのです。

しかし案の定、これによってダビデの居所がサウルに知られてしまいます。サウルは民を集めてケイラに下って来ます。ダビデは再び主に問います。「サウルはこの町に下って来るでしょうか？」「ケイラの者たちは私たちをサウルに引き渡すでしょうか？」と。すると主の答えは「サウルは下って来る！」「ケイラの人々は引き渡す！」でした。

何という無情でしょうか！ダビデは命がけでケイラを救ったのに、彼らはダビデを裏切ってサウルに引き渡すという。しかしダビデはある程度この成り行きを予想していたようです。思い出されるのは前の章の祭司の町ノブの大虐殺です。祭司アヒメレクがダビデを助け、ダビデを支えたために、その町は絶滅させられました。とするならケイラの住民もダビデをかくまうなら、同じく全滅させられる可能性があるわけです。そこでダビデは 13 節で部下 600 人と共にケイラから出て行きます。そして荒野や要害に宿ったり、ジフの荒野の山地に宿ったりしました。より荒涼とした山奥へ、不毛な山地の奥深くへ、と逃げ延びて行きました。私たちはここを読んでどう思うでしょうか。これは何とみじめな生活だろうか。なぜダビデは他の人を助けてあげたのに、このような仕打ちを受けなければならないのだろうか、とやり切れない思いを持つことでしょう。しかし良く見ると、この記事が言わんとしているメッセージは肯定的です。14 節：「ダビデは荒野や要害に宿ったり、ジフの荒野の山地に宿ったりした。サウルはいつもダビデを追ったが、神はダビデをサウルの手に渡さなかった。」　ここにはっきり語られていることは、「神はダビデをサウルの手に渡さなかった」ということです。サウルは 7 節で「神はダビデを私の手に渡された。」と勝手なことを言っていましたが、事実はその反対。神は彼を守っていてくださったのです。ですから私たちも困難な状況にあるからと言って、それだけで落胆すべきではありません。荒野をさまよい、山地に宿るダビデの生活の上にも、神の守りと臨在はしっかりあったのです。そのことに私たちはしっかり目を留めたいと思います。

さてこんなダビデに対する励ましが 15～18 節に記されます。何と彼のところに無二の親友ヨナタンがやって来ます。皮肉的なことはサウルはなかなかダビデを見つけられないでいたのに、ヨナタンはあっさりとダビデのもとに来ることができたことです。ダビデはこの時、厳しい状況に置かれていました。そしてこの後、19 節以降でさらに厳しい出来事が彼を待っています。そんな両者の記事の間にホッとするような記事、いや彼を大いに励ますエピソードが記されています。砂漠の中のオアシス。神はこうしてダビデを支えておられたということなのでしょう。

ヨナタンは「神の御名によってダビデを力づけた」とあります。「神の御名によって」と訳されている部分を、新共同訳は「神に頼るようにとダビデを励ました」となっています。英語のＮＩＶも「神に力を見出すようにと助けた」となっています。彼は人間的に励ましたのではなく、神に信頼し、神の真実に頼るようにと励ましたのです。これは

ヨナタン自身が日々そのような信仰に生きていたことを証ししているでしょう。そして17 節：「恐れることはありません。私の父サウルの手があなたの身に及ぶことはないからです。あなたこそ、イスラエルの王となり、私はあなたの次に立つ者となるでしょう。私の父サウルもまた、そうなることを確かに知っているのです。」　ダビデもこの御心は知っていましたが、ヨナタンはもう一度、この神の約束を確認し、その神の約束に立って生きるようにと励まします。確かにヨナタンが言うように、この神の約束に立てば、サウルの手が自分の身に及ぶことはあり得ないと断言できます。神は約束に真実な方だから、恐れることは何もない、と。この信仰に立つ時、ダビデは何と楽になったことでしょう。目の前の、肉の目で見える状況によって判断するのではない。漠然とした恐れや心配によって判断するのでもない。神の言葉を信じ、神の言葉に立って現実を新しい目で捉え直す。その時、人は恐れから解放され、神に信頼することから来る勇気と力とに生きる者とされるのです。

一難去ってまた一難。いよいよこの章のクライマックスが 19 節以降に記されます。何とジフ人がサウルにダビデのことを密告します。ジフ人とはケイラよりもさらに南にあるユダの山地の町です。ユダ族出身のダビデにとっては彼らも同胞中の同胞です。ダビデは自分の同胞が住む地域の山奥に命からがら逃げ延びて、ひっそり隠れようとしているのに、その地の住民が何と「ダビデはここにいます！」と通報したのです。これによってサウルの追跡が再開されます。ダビデはマオンの岩のところにとどまり、サウルもこのマオンの荒野に来ました。あそこにダビデがいる！とジフの人々は告げます。そして 26 節：「サウルは山の一方の側を進み、ダビデとその部下は山の他の側を進んだ。ダビデは急いでサウルから逃げようとしていた。サウルとその部下が、ダビデとその部下を捕らえようと迫って来ていたからである。」　一つの山を挟んで、その両側にサウルとダビデがいた。いつ両者が出くわすか分からないハラハラした状況です。上空から見れば実に奇しい仕方で両者が出会わないように進んでいたということでしょうか。他の聖書の訳ではもう少し違うニュアンスになっています。新共同訳聖書の 26 節はこうなっています。「サウルは山の片側を行き、ダビデとその兵は山の反対側に行った。ダビデはサウルを引き離そうと急いだが、サウルとその兵は、ダビデとその兵を捕らえようと、周囲から迫って来た。」　すなわちダビデはサウルから逃れるために山の反対側を進んだが、サウルはダビデを捕まえるために、いくつかの方向から軍を遣わして取り囲もうとした。英語の聖書を見ると、「閉じ込めようとした」とか「挟み撃ちにしようとした」と訳されています。サウルにとっては、山の後ろにダビデがいることは確実な

ので取り囲もうとしたということです。これではもはや袋のねずみ。捕えられるのは時間の問題ではなかったでしょうか。ところがこの土壇場でまさかの展開が起こります。サウルのもとにペリシテ人突入の知らせが入ります。より緊急を要する事態が発生しました。サウルはあと一歩でダビデを捕えるところまで追い詰めたものの、敵国ペリシテ人の侵入は放置できません。そこでダビデ討伐を打ち切りとし、急いで引き上げざるを得なくなった。何という導きでしょうか。これはもちろん偶然ではなく、神の守りの御手によることとして記されていることです。

この神の守りの特徴として二つのことを述べることができると思います。一つはその絶妙のタイミングです。あとわずかでも遅れたなら、ダビデはサウルに捕まっていました。彼はこの時、まさに風前の灯のような状態でした。これまで奇跡的にサウルの手から逃れて来たダビデでしたが、この時ばかりは万事休すという状況でした。もはや目をつぶって最後の瞬間を覚悟せざるを得ない状況でした。ところがこのギリギリの状況で神の力強い導きが現れたのです。これは私たちにとっても大いなる希望のメッセージではないでしょうか。すなわち私たちの場合も最後の瞬間までどうなるか分からないということです。もちろんもっと早く救いが与えられる場合もあるかもしれませんが、土壇場で主の救いが与えられることもあるのです。ですからどんなに切羽詰った状況に追い込まれていても、なお私たちは主にあって望みを持ち続けることができる。もう終わりだと思われる最後の最後に、主はこのように私たちを救い出すことができるお方です。

そしてこの主の守りのもう一つの特徴はペリシテ人が用いられたことでしょう。ペリシテ人とは、ダビデにとってもイスラエル人にとっても敵に当たる存在です。そんな敵が、ダビデの救いのために用いられた。ですから私たちの救いの道はどこから開かれるか分からないということになります。私たちも人間の知恵で考える限り、もはや望みなしという状況に置かれることがあるかもしれません。どう考えても、この状態から救われる可能性は考えられない、と。しかし神は私たちの想像を超えてみわざをなすことができるお方です。私たちにその状況での解決は考えられなくても、神は私たちが思ってもみない方法での解決策を持ちたもうお方です。ですから自分の小さな頭でただ悲観的な結論を出すことがないように。むしろこのような神があらゆる困難の中で私たちと共にいて下さることを仰ぎたいのです。

ダビデはこうしてサウルが帰って行く後ろ姿を見ることになります。殺人集団があと

一歩のところまで迫りながら、ペリシテ人来襲の知らせによって引き上げて行く。ダビデはどんなに放心状態のようになりながら、この光景を見つめたことでしょうか。彼はこの神の守りを記念して、この場所を「仕切りの岩」と呼んだのです。

最後に今日の箇所と関係が深い詩篇 54 篇を参照したいと思います。表題の後半に、「ジフの人たちが来て、『ダビデはわれらの所に隠れているではないか。』とサウルに言ったとき」とあります。まさに今日の章のことです。1 節は「神よ。御名によって、私をお救いください。あなたの権威によって、私を弁護してください。」と始まります。まさに危機のただ中での必死な祈りです。もう終わりだと投げ捨ててしまわず、最後まで神の御名を呼び、助けを祈り求めているダビデの姿があります。そしてこの詩篇の中心は真ん中の 4 節でしょう。ダビデは危機的状況の中でこう告白しました。「まことに、神は私を助ける方、主は私のいのちをささえる方です。」　彼は迫り来るサウル軍の足音を聞きながら、おろおろしていたのではなく、この信仰告白をもって神により頼んでいたのです。そしてその彼を主は確かに助け、守って下さった。最後の 7 節にあるように「神は、すべての苦難からダビデを救い出し、彼の目がその敵を眺めるように」して下さったのです。私たちも自分の歩みを振り返る時、このような神の守りが与えられた時のことを思い出すのではないでしょうか。まさにギリギリのところで、もう終わりではないかと思われたところで、まさかの方法で神によって助け出され、救い出され、無事に守られたことを。私自身も、ダビデほどの出来事ではないかもしれませんが、いくつかのことが思い出されますし、皆さんもそうだと思います。その神はこれからも私たちを守り、導いてくださいます。ダビデが逃亡中の状態に置かれていたように、私たちも苦しい毎日の中に置かれているかもしれません。しかしダビデをこのように奇しく守られた主が今週の私たちの歩みにも伴っていてくださいます。その主を見上げて、あらゆる状況において、このダビデの告白をもって、神により頼む喜びと力に生きたいのです。「まことに、神は私を助ける方、主は私のいのちをささえられる方です。」